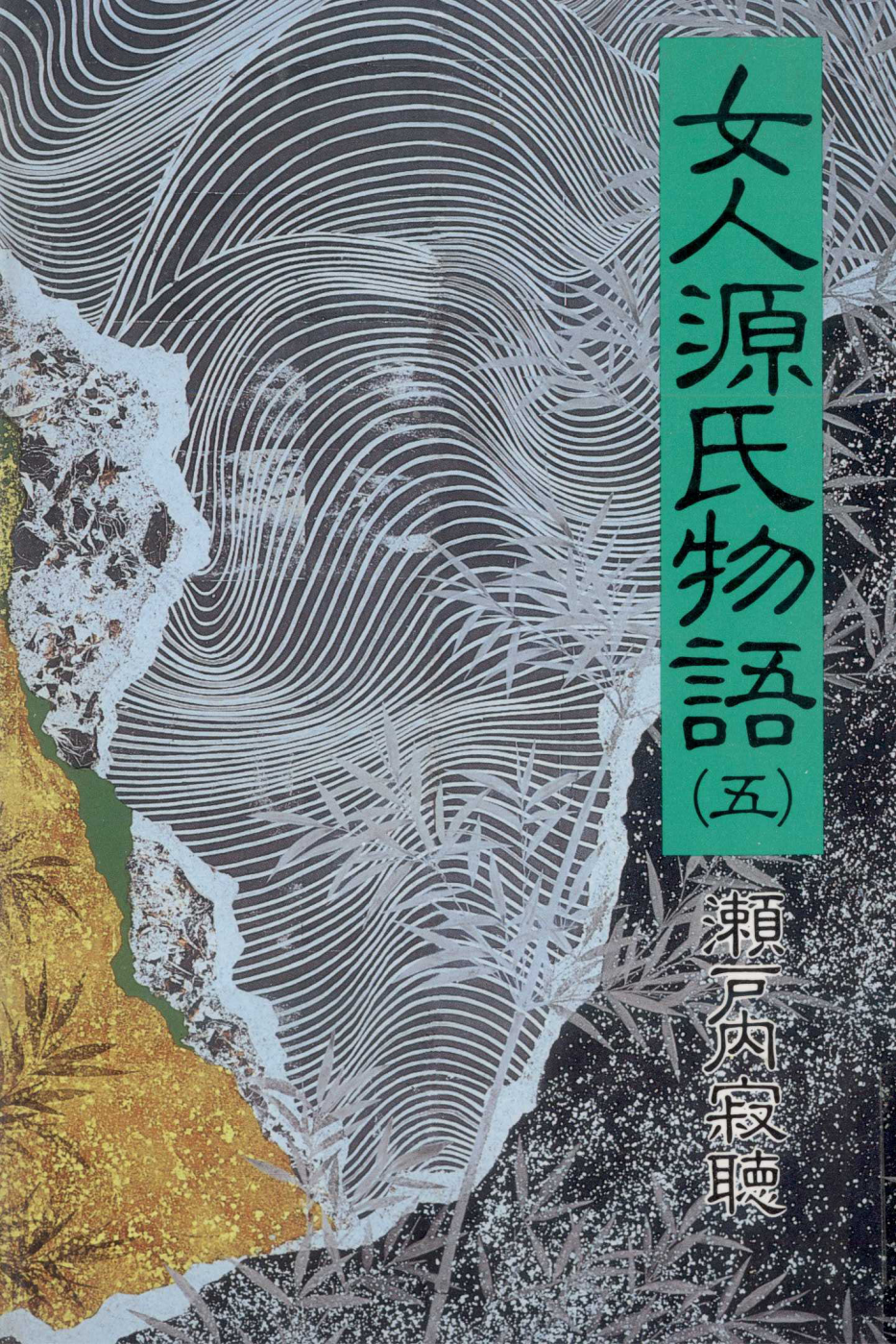




女人源氏物語

(五)

瀬戸内寂聴

瀬戸内寂聴 女人源氏物語
(五)

小学館

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

にょんげんじもあか
女人源氏物語 (五)

一九八九年八月一〇日初版第一刷発行

著者 瀬戸内寂聴

発行者 相賀徹夫

発行所 小学館

東京都千代田区一ツ橋三の三(〒101-01)

電話 編集 〇三―一九四―五五八七

業務 〇三―一三〇―五三三三

販売 〇三―一三〇―五七三九

振替 東京八―二〇〇番

印刷所 図書印刷

●造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。

●本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作権および出版者の権利の侵害になりますので、その場合はあらかじめ、小社あて許諾をお求めください。

©1989 Jakucho Setouchi

ISBN4-09-362015-6

Printed in Japan

女人源氏物語
(五)

目次

●光源氏の侍女中將の君のかたる

まぼろし
幻……………5

●光源氏の侍女中納言の君のかたる

ゆう
夕映……………31

●宇治の大君の侍女弁の君のかたる

はし
橋姫……………55

●宇治の大君のかたる

かわ
川波……………81

●宇治の大君のかたる

あけ
総角……………107

●宇治の中の君のかたる

やどり
宿木……………133

●二条院の中の君のかたる

はな
花の露……………159

● 弁の尻のかたる

浮うき 舟ふね
.....
183

● 浮舟の母中将の君のかたる

流りゅう 星せい
.....
209

● 浮舟のかたる

夢ゆめの 浮うき 橋はし
.....
231

寂庵対談
〔五〕 ゲスト 丸谷才一

千年を経てひびき合う作家の想像力.....
281

装画／加山又造 装幀／後藤市三

光源氏の侍女中將の君のかたる

紫上さまがお亡くなりになられてからの六条院春のお館は、限りない悲愁に包まれてすべての人々が茫然と過ごすうちに、はやその年も暮れてしまいました。

この上なく春を愛されたお方だけに、新しい春を迎えても、何かにつけ紫上さまを思い出されることばかりで、ことごとく涙を誘われます。

とりわけ光君さまの御落胆の御様子は傍目にもおいたわしくて、お慰めのしようもありません。

紫上さまの御病氣以来、信じられないほどのお見限りようで、どの女君のもとにもふつりとお訪ねしなくなられたのです。ましてお亡くなりになってからは、いっそうひとりをお守りになり、明けても暮れても御仏前に坐りつづけていらっしゃいます。涙にくれまどっていらっしゃるお姿は、それはまたそれでかえってなまめかしく、お側に侍るだけでわたくしなどは、

不思議な安らぎをいただけるのでした。

御不幸があつて以来、正体もないほど嘆き悲しまれるお姿を、人目にさらしたくないとお考えになり、ずっとわたくしども女房のいる奥向きにお過ごしになられるのが、わたくしにはもったいなく、嬉しいのでした。

御仏前には常に人少なくなさり、せいぜいわたくしや中納言の君だけを侍らせて、しめやかなお勤行^{つとめ}をあそばすのでした。わたくしどもふたりは、亡きお方にとりわけお目をかけていただいたので、御逝去を悲しむ心は人にひけはとらないつもりですけれど、光君さまの身も世もない御悲嘆ぶりを拝すると、嘆きの深さはとうていそのお足許^{あしもと}にも及ばないと、反省させられるのでした。

お亡くなりになった前後のことを飽きず繰り返し思い出されては、お話しなさるのでした。そのため、月日が過ぎていっても、いよいよ鮮明に、御臨終や御葬送の場面が心に刻みこまれます。

忘れもいたしません。あれは去年の八月十四日のことでした。明石^{あかし}の中宮さまが御所から下がられ、御病床をお見舞いあそばされた日のこと。珍しく御気分がよいとおっしゃって、中宮さまの御前で脇息^{きよく}によりかかり前栽^{せんざい}の草木にお目をとめていらっしゃいました。そこへ光君さ

まがお越しになり、

「ほう、今日はよく起きておいでになりますね。中宮さまの御前だと、御気分も晴れやかになられるんですね」

と、弾んだ声でおっしゃいました。

お三人でしみじみとお歌を取り交わされたその後のことでした。

「恐れ入りますけれど、どうかも、お引き取りあそばしてくださいまし。気分がひどく悪くなってまいりました」

と、おっしゃって几帳^{きちよう}を引き寄せて横になられた御様子が、さっきまでよりよほど弱々しく頼りなく見えたので、中宮さまが御心配そうに、お手をおとりになり、どうなさったのかと覗^{のぞ}きこまれました。そのまま、今にも消えゆく露^るのようにはかなげになられ、今は御最期と様子が急変しましたので、たちまち騒然となりました。以前にもたびたびこんなことがあり、愕^{おどろ}かされた後に蘇生^{そせい}された例もありましたので、夜一夜修法^{しゆぽう}の限りを尽くされましたが、その甲斐^{かい}もなく、夜の明ける前にはなくなってしまうのでした。

わたくしども日頃もつたいないほど可愛^{かわい}がっていただいた女房たちは、悲しみのあまり誰一人正気らしい者もなく泣き惑うばかりでした。まして光君さまは氣もそぞろの御様子の中から

必死に氣を強くもとうとなさり、お側近くにお見舞いになった夕霧大將さまを几帳の側に呼び寄せられ、

「出家をあれほど望んでいたのに、叶えてやらす逝かせるのがいとおしい。仏の御功德に、今はせめて冥途の闇を照らしてくださいさるようお頼み申したいから、剃髪ていはつの用意をさせてやってください。まだそののできるしつかりした僧侶が残っているだろうか」

と、お命じになりました。

「お心通りにしてさしあげられるのは、結構なことですけど、もうすっかりこと切れておしまいになってからお髪かみだけを落とされても、格別功德にならないのではないでしょうか」

と、夕霧さまは分別らしくおっしゃりながら、残っている僧たちに、あれこれ葬儀のことなどお指図なさるのでした。わたくしどもが度を失って泣き惑うのを、

「静かに、落ち着きなさい」

とたしなめられながら、夕霧さまはつと、几帳の端を引き上げて、近々とおなきがらをさし覗かれました。ふだんなら決してそんなことを許されるはずもないのに、光君さまも動転していらっしやるせいか、おなきがらをかくそうともせず、

「こんなにまだ生きているとしか見えないのに、もうはっきり死相があらわれてきた」

とお袖を顔に押しあててお泣きになるのです。お髪をつくろうことさえ誰も気づかずそのままにされているのが、ふさふさと清らかにあたりいっぱいひろがり、一筋のもつれもなく灯の光に艶々と照り輝いて、目もくらむほど鮮やかなのです。漆のようなお髪の中に、透き通るような鬱金桜色のお顔が浮かんで、螺鈿をちりばめたように見えるのが、美しいとも清らかとも形容の仕方ありません。

御生前の隙もなく気を配って取りつくろっていらつしやった御様子よりも、全く意識をなくされた無心な御様子で頼りなく横たわっていらつしやるお姿こそ、限りなく美しく、言葉もありません。

夕霧さまはそのおなぎがらを、涙をぬぐいもなさらずさし覗かれ、そっと御自分の膝のあたりまで流れていたお髪の端を袖のかげで握りしめていらつしやいました。たまたま、そのお手の横に打ち伏して泣いていたわたくしの目に、お髪を握りしめたり、そっと撫でられたりする夕霧さまの怪しいしぐさが映ったのでした。

御生前、お顔を合わされたとも思えないだけに、おなぎがらになってはじめての御対面でも、これほどお心を捉えられたのかと、おいとしくも、浅ましく、複雑な想いが湧いたことでした。でもあれば、もしかしたら気が動転していたわたくしの、目の誤りだったのかもしれない。

その翌日十五日の暁方に、ともかく御葬送のことが執り行われました。

あのまたとない美しいすぐれたお方が、ただ一筋のはかない煙になって晴れた空へ立ち上ってゆかれるのを見て、声をあげ泣かないものがいたでしょうか。

帰りの車から、悲しみのあまりともすればまろび落ちそうになる女房たちを、車副せいの人たちが、そうはさせまいと介抱に手を焼いておりました。

お悲しみのあまり、もしものがあつてはと心配で、光君さまの御寝所の傍らに、わたくしはずっと夜伽よかに待っておりました。

夢の中にも、呻うめき声をあげられたり、涙を流されたりなさる光君さまを夜通し見守っておりますと、おふたりの御仲なかつの只ただならぬ宿世すくせの御縁の深さが思い知らされて、おいたわしきはひとしお身にしみてくるのでした。

わたくしにはすっかり気を許していらっしゃるので、光君さまは外聞も忘れて、ひたすらお泣きになったり、くどくどと返らぬ愚痴をこぼしたりなさいます。

「こうなつては一日も早く出家して、昔からの本意を遂げたいと思うけれど、あの人に先立たれた悲しみゆえの出家だと、後々の世まで女々しさを取り沙汰されるのも恥ずかしい……」
などしみじみお打ち明けになることもありました。

これほどのお方に、死んだ後、これほど嘆いていただける紫上さまは、女の中でも最高のお幸せなお方ではないかと羨ましくさえなりました。

紫上さまは女として幸いに輝いていらっしゃる時にも、少しもおごり高ぶったところがおありでなく、身分の低い者にもこまやかな思いやりをお見せになり、世間の評判はこの上なくよく、奥ゆかしくて気転もきき、朗らかなところもありで、ほんとうにあのような完璧な女君も、いらっしゃるものではありませんでした。

それほど縁のない人々でも、憧れお慕い申しあげるのであるもの、ましてお側近くで長年お仕え申した女房たちは、もう魂もぬけはて、生きる張りも失い、出家して早々と尼になってしまふ者も、山奥に逃れ去る者も、次々あらわれる始末です。

格別の御愛顧を頂戴していたわたくしとて、同じ思いですが、

「わたくしの死後は、しっかり光君さまのお側にお仕えして、何もかもわたくしのしていた通りにこまやかに面倒をみてさしあげておくれ。これがわたくしの遺言ですよ。きいてくれないと、怨みますよ」

と、おっしゃっていただいたお言葉にそむくこともできず、光君さまに日夜お仕えしているのです。

年が明けても、六条院では例年のように華やかな管絃の催しも一切なく、淋^{さび}しい極みの春です。

わたくしたち女房も、墨染めの色濃い喪服を着て、悲しみの色は改まりようもありません。

光君さまは絶えて他の女君をお訪ねすることもなくなり、いつでもこちらにばかりいらっしゃるので、お側近くでお仕えできるのがせめてもの慰めと思うほかありません。

時々、夜一夜、紫上さまをしのばれてお眠りになれなかった朝とか、ひとしとお淋しさの身にしむ夕暮れなどには、中納言の君やわたくしのほか、とりわけ可愛がっていただいた女房たちをお側近くに集められて、しみじみ亡きお方の思い出話をなさるのでした。

「わたしは現世の果報からいえば、不足をいっては何体ないほど高貴な身分に生まれながら、一方では、世間の人よりは格別不本意な運命に翻^{はんろう}弄されてきたような気がする。仏がこの世のはかなさや苦をつぶさに知らせようとはかられた宿命なのかもしれないね。それをわざと気づかぬふりをして出家もせずにこれまで生き永らえてきたので、こんな一生のたそがれ時になって、悲しみの極みを味わわれ、宿世のほども自分の心の至らなさもすべて見極め思い知らされたようだ。こうなってかえって心が落ち着き覚悟が定まったようにも思う。今ではもうなんの心のほだしになる未練もなくなったから、いつ出家してもいいのだけれど、こうして亡き人